

問い続ける力を育てる教室

先日、三宅村中村教育長、本校研究主任とともに、墨田区立二葉小学校を訪問し、6年生の授業を参観させていただきました。

参観した授業は、総合的な学習の時間における「平和」をテーマとした探究的な学びでした。あるグループが制作している「紙芝居の結末をどうするか 検討すること」。ハッピーエンドにしたらよいかか否か。その問いを起点に、クラス全体で「平和とは何か」を多角的に考えていく学習でした。松原先生は、以前に切磋琢磨し合った同僚の先生です。当時も若きエースとして学校を支え、柱となって活躍されていました。幸いなことに現在もつながりがあり、今回の学校訪問が実現しました。

授業では、子供たちは平和を表すさまざまなキーワードをもとに、ダイヤモンドチャートを使って優先度を議論していました。安心、笑顔、治安、差別……。同じ言葉でも、どこに置くかはグループによって異なります。

「なぜそこに置くのか」を問い合いながら、自然と対話が生まれ、互いの考えに耳を傾ける姿が教室いっぱいに広がっていました。



印象的だったのは、子供たちが結論を急がず、自分の考えを丁寧に言葉にしていたことです。誰かの意見にうなずきながら、「でも私はこう思う」と続ける。そのやり取りの中で、平和という大きなテーマが自分自身の問題として立ち上がっていく様子が伝わってきました。

一方、教師は説明者ではなく、子供たちの思考に寄り添う伴走者でした。各グループに声を掛けるのは、「紙芝居の結末をどう考えるか」という視点をそっと示すことのみ。また、全体共有の場面では、子供たちの考えを整理しながらつなぐファシリテーターに徹していました。教師が前に出るのではなく、子供たちの対話を支える姿勢が、教室に安心感と集中を生み出していました。子供たちが自分の言葉で根拠を語りながら議論する姿は、日頃の積み重ねがあってこそそのものだと感じました。

「探究」とは、答えを見つけること以上に、問い続ける力を育てる営みであるのだと改めて実感しました。自分の想いを自分の言葉で語る6年生。その姿を静かに支える教師の在り方に、学びの本質を見ました。

授業後には、副校長先生、研究主任の先生、松原先生と意見交流をする機会もいただきました。地域とつながりながら探究をデザインしていくことの課題ややりがいを共有し、距離は離れていても、教育への思いは同じであることを強く感じました。

ご多用の中、快く受け入れてくださった墨田区立二葉小学校の校長先生はじめ、副校長先生、授業者の松原先生、学年の先生方、研究主任の高橋先生、温かく迎えてくださった主事の皆様、そして6年生の皆さんに心より感謝申し上げます。今回の訪問で得た学びを共有できたことは、私たちにとって大きな財産です。

東京都、そして三宅島の未来に思いを馳せながら、今回の学びをどのように本校の実践へつないでいくか。いただいた多くのヒントを手がかりに思考を巡らせる時間が、私の楽しみになっています。この出会いを大切にしながら、子供たちの可能性を信じ、実践を丁寧に積み重ねていきたいと思っています。